

シナリオ【親切な女】  
決定稿・イワモトケンチ

§ 一 一郎の会社・営業部（昼）

一郎の会社、デジタル・スペシャル・サービス株式会社。

月間営業成績の棒グラフの前で上司の加藤（四六）に怒られている、柳田一郎（二九）。

加藤、手に持ったうちわを振り回しながら。

加藤

「一郎！ いい加減にしろ！」

営業成績表。柳田一郎の所は棒グラフの棒がない。

加藤の声

「今月ゼロはお前だけだぞっ！」

一郎

「（頭をかいて）毎日、暑くて……」

加藤

「ばかやろう！」

一郎

加藤、一郎の頭をうちわでゴチンとやる。

「痛っ」

§ 二 大きな会社・前（昼）

会社の営業用カブ（イタリア製）に乗り、走って来る一郎。

N

「柳田一郎。二十九歳。独身。コンピューター会社の営業部勤務」

会社の前で停車して、カブから降りてヘルメットを外す、一郎。

§ 三 大きな会社・応接室（昼）

担当者の前にパンフレットを広げて説明する、一郎。担当者、興味ない様子で煙草を吸いながら落ち付きがない。

N

「営業成績最下位記録行進中」

「とりあえず間にあっているから」と立ち

N

上がり、出て行く担当者。  
「…そして、また断られる」  
一郎、ずがるような目で担当者を見る。

#### ※四 大きな会社・前（昼）

元気なく、カブに股がる、一郎。

チューイングガムを口に入れて噛み始める。

一郎

「向いてないんだよな…営業。しかし、暑いなあ（ため息）…」

一郎、ガムで風船を作り、割る。

ヘルメットをかぶり、カブを走りらせる、一郎。

#### ※五 小さな事務所・室内（昼）

入って来た一郎、「社長さんですか？」と腰を低くする。

扇子片手にキャンディーをくわえたチヨビ髭の社長が「ええ」と答える。

パンフレットを広げようとする、一郎。

社長、手を振って「いららない。いらないと去って行く。」

N

「またしても、断られる」  
一郎、にらむように社長を見る。

#### ※六 薬師寺の屋敷・前（夕）

周囲を物色しながらカブで走る、一郎。

大きな屋敷。その前に停車してある旧式の

黒い高級国産車。

表札「薬師寺」。

薬師寺節子（二五）とデパートの買物袋を両手に持った落丸あやめ（六一）。

節子、背中に蝉が入ったらくし、パニック状態。

節子

「嫌。嫌。背中に蝉が入ったもの。あやめ

あやめ

さん、助けて」

「どういたしましょう。困りました。わたしも蝉はだめなので……」

節子、足をバタハダさせて騒ぎ続けている。あやめ、両手に袋を下げたまま困っている。

一郎の乗ったカブが近づく。

あやめ、反応して前が出る。

あやめ

「あの。もし！」

一郎、二人の前で停車する。

一郎

「はい？」

あやめ

「お嬢様のお背中に蝉が入ってしまったて困

つております」

節子

「（暴れて）助けてください！」

一郎

「蝉、ですか」

一郎

一郎、ゆっくりカブを降りて節子に近づく。

一郎

「じゃ、ちよつと失礼して……」

一郎

節子の背中に手を忍ばせる、一郎。

一郎

節子、急に緊張した面持で動くのをやめる。

一郎

「（ニヤリとして）捕まえた」

一郎

節子の背中から捕まえた蝉を出して、節子

節子

に見せる。

節子

節子、蝉を見せられて逃げる。

節子

「怖い」

あやめ

あやめも逃げる。

あやめ

「ひい」

あやめ

一郎、蝉を空に逃がす。

あやめ

飛んで行く、蝉。

## §七 メインタイトル

【親切な女】

## §八 薬師寺の屋敷・座敷（夕）

向かい合う形で分厚い座布団に座る、一郎と節子。

あやめがお茶とお茶菓子を一郎の前に置く。

あやめ 「本当にありがとうございます。ありがとうございました。あなた様は命の恩人です」

一郎 「そんな。大袈裟な」

あやめ 「いえいえ。お嬢様は虫が大っ嫌いで、あのままでしたら、おそらく心臓麻痺で死んでしまつたかも知れません」

一郎 「まさか」

節子 「手は洗われましたか？」

一郎 「はい？」

節子 「蝉を触られたので、消毒した方が……」

一郎 「（笑つて）……大丈夫ですよ」

節子 「洗われた方が良いと思います」

あやめ 「そうなさつてください。危険ですからね」

あやめ、一郎に近づき手を引く。

あやめ 「こちらです」

一郎、あやめに引かれるままに立ち上がる。

あやめさん。わたしも背中が不潔なので

シャワーをいただいできます」

「はい。すぐ着替えの準備をいたしますから……はい、こちら」

あやめ、一郎の手を引いて出て行く。

一郎、首を傾げながら出て行く。

### 第九 薬師寺の屋敷・洗面所（夕）

石鹸で手を洗う、一郎。

あやめが忙しそうに着替えを持って横切つて行く。

一郎 「ちよつと営業してみようかな……。もしかしたら……（ニヤリとする）」

### 第十 薬師寺の屋敷・座敷（夕）

座敷に広げたパソコンのパンフレットを熱心に見ている、あやめ。

その前に座る、一郎。

一郎 「どうですか？ すごく便利なんですよ」

あやめ

「はあ……わたしにはちんぷんかんぷんで……  
シャワーから戻った新しい洋服に着替えた  
節子が入ってくる。」

節子

「なあに？それ」

あやめ

「パソコン？」

節子

「ええ。パソコンです」

節子

「パソコン」

一郎

「節子、一郎の隣にするりと座る。」

「私、パソコンメーカーに勤めてまして、  
これを訪問販売するのが私の仕事で……」

一郎、名刺をさし出す。

一郎の名刺を受け取る、節子。

節子

「（名刺を見ながら）丁度よかつたわ。わ  
たし、欲しかつたんです、パソコン」

一郎

「（嬉しそうに）そうなんですか！」

節子

「でも、難しいんでしょ？パソコンって」

一郎

「当社は二十四時間フルサポートです。困  
つた時は電話一本で専門の技術者がすぐに  
おうかがいしますです。はい」

節子

「（淋しそうに）あなたは？あなたは来て  
いただけなの？」

一郎

「私は営業ですから……」

節子

「あなたがいいわ。そうしていただけるの  
なら、これいただきたいのだけだ」

一郎

「（ちよつと困つて）……メンテナンスはそ  
れ専門の技術者が行うことになっていまし  
て……」

あやめ

「（乗り出して）そこをなんとか、お嬢様  
のために……」

一郎

「はい。わかりました。では、そのように  
いたします」

節子

「節子とあやめ、目を合わせて「やったー」  
と笑う。」

一郎

「納品後は私が責任を持って面倒みさせて  
いただきます」

節子

「無理言つてごめんなさい」

一郎 「いえいえ」  
節子 「それで、これは何台くらいいたただけばいいのかしら：十台くらい？」  
一郎 「十台？」  
節子 「え？もつと？五十台とか？」  
一郎 「（笑つて）一台で充分ですよ」  
節子 「一台？たったなの？」  
あやめ、意味がわからず、ぼかんと見ている。

### § 二 薬師寺の屋敷・キッチン（夕）

あやめが魚をさばいている。

### § 三 薬師寺の屋敷・食堂（夜）

タイ料理。  
中央に大皿にのつた大きな魚料理。  
タイビールが入ったグラスが三つ。  
あやめが小皿に取り分けている。  
向かい会つて座る、一郎と節子。  
食堂にはセスナの写真が飾つてある。  
一郎、ちらりと写真を見る。  
節子 「よかつたわ。お父様がなくなつてからはいつもあやめさんと二人つきりなので淋しくて」  
一郎 「そうですか。こんなに大きなお屋敷なのにお二人だけで：」  
節子 「ええ。今日は本当に久しぶりのお客様。でも、なんだか無理にお食事誘つてしまつたみたいで、ごめんなさい」  
一郎 「いえ、契約していただいで、その上、夕食までごちそうになるなんて、恐縮です」  
あやめ 「はい。どうぞ」  
あやめ、一郎の前に取り分けた小皿を置く。続いて節子の前に置く。  
一郎 「（魚を見て）これは何と言う魚ですか？」  
あやめ 「xです」

一郎 「そんなんですか。おいしそうですね」

あやめ、自分の席に座る。

節子 「乾杯しましょうか」

節子、ビールグラスを取る。

一郎とあやめもグラスを取る。

節子 「一郎さんの健康と幸福をお祈りして、乾杯」

一郎 「恐縮です」

あやめ 「乾杯」

節子、ビールを飲む。

一郎、ビールを飲む。

あやめ、ビールを飲み、グラスを置く。

「さあ。どうぞ。わたしのような老人が作

った料理ですから、お口に合うかどうか」

一郎 「いえ。とても、おいそうです。いただき

ます」

一郎、魚を食べる。

一郎 「うーん。おいしいですよ、これ」

あやめ 「（笑つて）よかった」

節子 「（笑つて）よかったわね。あやめさん」

一郎、魚を旨そうに食べ続ける。

あやめ 「まだまだありますから。どんどんお食べ

になつて」

節子、一郎の男らしい食べっぷりをうっと

りとして見ている。

あやめも笑っている。

### § 三 一郎の会社・営業部（朝）

一郎、月間成績表の前でニヤニヤしている。

柳田一郎：1台の棒グラフ。

上司の加藤がおもちゃのバットで一郎の頭

をポカリと叩く。

加藤 「1台くらいで安心するな！」

一郎 「ゼ口よりいいでしょう」

OLの声 「柳田さん！魚！」

振り向く、一郎。

OLが半透明のビニールに包まれた大きな魚を持って近づく。贈り物リボン付き。

OL

「なに？これ」

と言つて魚を一郎に渡す。

一郎、首を傾げながら受け取る。

一郎

「なんだろう？」

差し出し人は「薬師寺節子」となっている。

#### ㊦一四 イメージ

節子が笑つて大きな魚を差し出す。

一郎の声 「あ！」

#### ㊦一五 一郎の会社・営業部（朝）

加藤、鼻をつまんでおもちゃのバットを振り回している。

加藤

「生臭いんだよ！あつちに持つて行け！」

一郎、首を傾げながら魚を持って出て行く。

#### ㊦一六 薬師寺の屋敷・前（昼）

一郎の会社のバンが屋敷の前に止まる。

後から一郎の乗ったカブ。

降りてくる、技術部の鈴木。

カブから降りる、一郎。

車の後ろに周り台車を下ろす、鈴木。

パソコンの箱を下ろす、一郎と鈴木。

#### ㊦一七 薬師寺の屋敷・節子の部屋（昼）

パソコンをセッティングしている、一郎と鈴木。

後ろで笑いながら見ている、節子とあやめ。

#### ㊦一八 薬師寺の屋敷・前（昼）

台車を荷台に積む、鈴木。

運転席に乗り、帰って行く。

※一九 薬師寺の屋敷・節子の部屋（昼）

パソコンを起動させる、一郎。

一郎 「このスイッチを押せば電源が入ります」

一郎の横に座り、のぞき込む節子とあやめ。

節子・あやめ 「はい」

一郎 「そうしますと。メインメニューが現れます」

節子・あやめ 「メイン・メニュー？」

一郎 「パソコンの玄関です」

節子・あやめ 「（うなづいて）ああ。玄関」

一郎 「あとはここにあるアイコンをクリックして

…」

節子・あやめ 「アイコン？クリック？」

一郎 「いや、この絵のマークをこのように押し

ますと…」

節子とあやめ、じつとモニターを見ている。

一郎 「ソフトが立ち上げられます」

立ち上がる、ソフト。

節子・あやめ 「（感動して）ああ！すごい」

※二〇 薬師寺の屋敷・玄関（昼）

帰ろうとしている、一郎。

見送る、節子とあやめ。

一郎 「あの、魚…」

節子 「届きました？」

一郎 「どういうことですか？」

節子 「一郎さん、夕べあの魚がとてもおいしい

とおっしゃっていたので」

一郎 「それで、わざわざ？」

節子 「わたし、人が嬉しそうにしている顔が大

好きなので」

一郎 「…そういうこと、だったんですか」

節子 「召し上がってください」

一郎 「あ。ありがとうございます」

節子、笑う。

あやめも笑う。  
一郎 「それでは。会社に戻ります」

出て行く、一郎。  
笑ったまま手を振って見送る、節子とあやめ。  
節子・あやめ「ごきげんよー」

### §二 一郎の会社・営業部（昼）

納品書を持って戻ってくる、一郎。  
加藤の机に向かう。加藤は不在。  
納品書を加藤の机に置く。

OLの声  
「柳田さん。薬師寺さんからお電話入ってます」

振り向く、一郎。

一郎 「はい」

一郎、電話に出る。

一郎 「おたせしました。柳田ですが……」

### §三 薬師寺の屋敷・前（夕）

カブに乗った一郎、屋敷の前で止まる。  
慌ててカブから屋敷の中に降りて入って行く。

### §三 薬師寺の屋敷・節子の部屋（夕）

パソコンの前に座って悩んでいる、節子。  
あやめに案内されて入ってくる、一郎。

一郎 「どうしました？動きませんか？」

節子、マウスを持ったまま振り向く。

節子 「（マウスを差して）これが動かなくなっ

てしまっ……」

一郎 「え！」

節子の隣に座る、一郎。

一郎 「どれどれ……」

パソコンの周りを見る。

一郎 「ちよつと失礼」

節子の持つマウスを受け取る、一郎。

そのままマウスを引っ張ってみる。

マウスの差し込みが抜けていることがわかる。

一郎 「（笑って）なんだ。抜けてるだけですよ。

ほら」

一郎、節子にマウスの差し込み口を見せる。

節子 「（笑って）あらっ」

#### §二四 薬師寺の屋敷・キッチン（夕）

あやめがタコの足を切り落とす。

#### §二五 薬師寺の屋敷・食堂（夜）

食事をする、三人。

スペイン料理。タコイボソテー。パエリア。

スペイン・ワイン。

「図々しく、また、すいません」

節子 「こちらこそ。また、無理に誘ってしまっ

てごめんなさい」

一郎、旨そうにタコイボソテーを食べる。

あやめ、その様子を笑って見る。

「一郎様は本当においしそうに食べていた

だけるので作り甲斐があります」

節子 「（笑顔）一郎さんって、本当においそう

に食べる方ですね」

一郎 「本当においしいんからですから、おいそ

うに食べるのは当り前です」

節子、あやめを笑って見る。

あやめ、嬉しそうに笑う。

#### §二六 薬師寺の屋敷・食堂（夜）

「一郎様江」とチヨコレートで書かれた特製ケーキを切る、あやめ。

一郎、コーヒーを飲みながら食堂に飾って

あるセスナの写真を見ている。

一郎 「昨日から気になっていたんですけど、セ

スナ、お持ちなんですか？あ、すいません」  
あやめ、皿に取り出したケーキを一郎の前に置く。

節子  
「亡くなったお父様がお好きだったのだから」  
「へー。いいなあ。僕、子供の頃から飛行機が大好きで……」

あやめ、皿に取り出したケーキを節子の前に置く。

節子  
「ありがとう。（笑ってうなづき）そんなんですか」

一郎  
「でも、僕の淋しい給料じゃ、家用機なんて夢のまた夢ですけどね（笑う）」

節子  
「だめよ。あきらめては。信じ続ければ夢は必ずかなうものです」

一郎  
あやめ、自分の席に戻り、にやりと笑う。  
「（首を傾げて）だと、いいんですけどね」  
コーヒーをもう一口飲む、一郎。

### §二七 一郎の会社・営業部（朝）

胸に「親切係」のプレートを付けたホテルマンのような男が入ってくる。

親切係  
「柳田一郎様、いらっしゃいますでしょうか？」

一郎  
マイ・デスクに座っていた一郎が立ち上がる。  
「はい」

親切係、一郎を見て大きく笑う。  
「はじめまして。私、一郎様の親切係、コウタリと申します」

親切係、一礼する。  
「親切係？」

一郎

### §二八 飛行場・整備場（朝）

歩いてくる、親切係と一郎。

親切係、停まっているセスナを差し示す。  
セスナには「一郎号」とネームが入っている

る。セスナのプロペラ部分に大きな贈り物  
リボンが飾られている。

親切係

「あれでございます」

一郎、驚いてセスナを見る。

一郎  
「うそ……」

### §二九 イメージ

節子が笑顔でセスナの写真を前に差し出す。

### §三〇 飛行場・整備場（朝）

セスナの前に立つ、一郎と親切係。

一郎、呆然とセスナを見つめている。

親切係  
「それでは、ここにサインをいただけます  
か？」

伝表を差し出す、親切係。

一郎  
「これは僕のものなんですか？」

作業員  
「（笑って）はい。勿論でございます」

一郎、信じられない顔でもう一度セスナを見る。  
停まっている一郎のセスナ。

C  
M

### §三一 薬師寺の屋敷・前（昼）

猛スピードの一郎の乗ったカブ、屋敷の前  
に急停車。

慌てて降りて屋敷の中に入って行く。

### §三二 薬師寺の屋敷・玄関（昼）

息を弾ませた一郎。

一郎  
「ごめんください」

あやめが歩いてくる。

あやめ  
「（笑って）一郎様」

丁寧にお辞儀をする、あやめ。

一郎

「（慌てて）いらつしやいますか？」

あやめ

「お嬢様、昨夜は遅くまでパソ、コンのお勉強をなされていたようで、まだ、お眠りになられていますの。」

一郎

「そうですか。」

あやめ

「急用でございますか？」

一郎

「あやめさん、ご存じですか？セスナのこと。」

あやめ

「あら。もう届きましたか、セスナ。」

一郎

「ご存じなんですな。」

あやめ

「ええ。夕べお嬢様に頼まれました、わたくしが注文したものですからね。」

一郎

「どういふつもりなんですか？あんな高価ものを。どうし僕なんか。」

あやめ

「お礼ですよ、普通の。蝉とかパソコンとかいろいろとお世話になつていますのでね。」

一郎

「そんな！普通のお礼がどうしてセスナなんですか？」

節子

「パジャマ姿の節子が入つて来る。」

あやめ

「どうしたの？あやめさん。」

節子

「いや、一郎さんがご丁寧早速、セスナのお礼に見えられて。」

節子

「（嬉しそうに）そう。もう届いたの？気に入つていただけたかしら（一郎を見る）。」

一郎

「（曖昧に）いや…あの…」  
笑顔の節子。

### §三三三 薬師寺の屋敷・キッチン（昼）

あやめ、カキの殻を割る。

### §三三四 薬師寺の屋敷・庭（昼）

庭に出されたテーブルでランチする三人。  
イタリアン・ランチ。カキもの前菜。ウニ  
クリームスパゲティ。グリッシーニ。イ

タリアン白ワイン。

一郎、うつむいたままカキの前菜を食べている。いつもより食べる速度が遅い。

節子

「一郎さん」

節子

一郎、顔を上げる。

一郎

「お願いがあるのだけれど……」

節子

「はい？」

「パソコンのソフトが欲しいのだけど、どこでどうやって買えばいいのか、わたしもあやめさんもわからなくて……」

一郎

「秋葉原へ行けば何でもそろってます」

節子

「あやめさん、アキハバラって？」

あやめ

「電気屋さんの街ですね、一郎さん」

一郎

「そうです」

節子

「お願いできないかしら、お買物」

一郎

「（少し考える）」

一郎

心配そうに一郎を見続ける、節子。

節子

「……いいですよ」

あやめ

「（大きく喜び）よかった！」

「（笑って）よかったですね。お嬢様！」  
一郎、ワインを一口飲む。

### 三五 一郎の街・路地（夜）

秋葉原電気街の大きな紙袋を持った一郎が歩いて行く。

一郎

大粒の雨が降り出す。

一郎

「まいったなあ……」

紙袋をかばうように濡れながら歩き続ける、一郎。

スツと赤青黄色の派手な傘が一郎の頭上に出でくる。

節子

一郎、反応して見る。

節子

節子が傘を持って笑って立っている。

節子

驚く、一郎。

節子

「ごくろうさま」

一郎  
節子

「どうしてここに？」  
「（笑つて）ちようど、あやめさんと車でそこを通りかかったら一郎さんのお姿をお見かけして……」  
一郎、車の方向を見る。  
黒い国産車の運転席に乗っている、あやめ手には白い手袋。一郎にお辞儀する。  
一郎もお辞儀する。

§三六 一郎のコーポ・前（夜）

一郎の声 「あ。そこです」

あやめの運転する車、一郎のコーポの前に止まる。

一郎、車から降りる。

節子の声  
一郎の声

「一郎さんのお部屋、拝見したいわ」  
「え？」

§三七 一郎のコーポ・室内（夜）

ドアを開けて入ってくる、一郎。電灯を点ける。

狭いワンルーム。

一郎に続いて入って来る節子とあやめ。

部屋の狭さに啞然としている、二人。

一郎 「（頭をかいて）だから言ったでしょ。狭いつて……」

§三八 一郎のコーポ・前（夜）

運転席に乗り込む、あやめ。乗り込むと白い手袋をつける。

節子に自分の傘をさしてやっている、一郎。

後部席のドアを開けてやる、一郎。

乗り込む、節子。秋葉原の袋が見える。

節子  
一郎

「とても、お気の毒だわ」  
「え？」

節子 「もっと広いお部屋に住むべきよ。一郎さん」

一郎 「そりゃあ、そうしたいけど、僕の給料じゃ、これが精一杯です」

節子、本当に気の毒そうに一郎の顔を見上げています。

一郎 「そんな顔しないでくださいよ」

節子 「ごめんなさい（笑顔に戻る）」

一郎 「ソフトの方は明日、僕がインストールしますから」

節子 「ありがとうございます」

一郎 「じゃ。おやすみなさい」

ドアを閉める、一郎。

節子 「おやすみなさい」

あやめ、軽くクラクションを鳴らした後、発進する。

見送る、一郎。

一郎 「（考えて）家？…まさか」  
コーポに戻って行く、一郎。

### §三九 薬師寺の屋敷・前（昼）

一郎の乗ったカブ、屋敷の前で止まる。  
降りて屋敷の中に入って行く、一郎。

### §四〇 薬師寺の屋敷・節子の部屋（昼）

ソフトを次々とインストールして行く、一郎。  
後ろでニコニコしてその様子を見ている、節子。

### §四一 薬師寺の屋敷・キッチン（昼）

あやめが蒸し器の蓋を開ける。  
たちのぼる湯気。

### §四二 薬師寺の屋敷・庭（昼）

外に出されたテーブルでランチする、三人  
飲茶。

節子

一郎、肉マンを口に入れる。  
「一郎さん。お家、買ったんだけど、あと  
で見て欲しいの。気に入っていたただけと  
いいのだけど」

あやめ

一郎、肉マンを喉につまらせる。  
「（笑つて）家具もお願ひしたから、今日  
にでも越せますよ」  
ムせている、一郎。

節子、心配して一郎を見る。

あやめ、立ち上がって一郎の背中を叩いて  
やる。

あやめ

「大丈夫ですか？」  
節子、その様子を見て笑っている。

### §四三 一軒家・前（夕）

親切係と一郎が一軒家の前に立っている。  
入口のドアに飾られている贈り物リボン。

表札「柳田一郎」。

一郎、唾然として見上げている。

親切係

「こちらに駐車場もあります。一郎様、お  
車はお持ちですか？」

一郎

「いえ……」

### §四四 一軒家・二階（夕）

広々とした部屋。

家具はすでに用意されている。

階段を上がってくる、親切係と一郎。

一郎、あまりにの立派さに驚く。

親切係、ダイニングを見せる。

「ダイニングでございます」

親切係

親切係、和室を見せる。

親切係

「和室でございます」

親切係、ベッドルームを見せる。

親切係 「ベッドルームでございます」

親切係 「親切係、浴室を見せる。」

親切係 「浴室でございます」

親切係 「親切係、屋根裏部屋を見せる。」

親切係 「オーデイオルームでございます」

親切係 「中二階の階段から降りてくる、親切係と一郎。」

不動産屋 「いかがですか？ 一郎様」

一郎 「（困惑している）はあ……」

### §四五 屋台・やきとり屋（夜）

カウンターで並んで飲む、一郎と小学校時代からの友人・山田新吉（二九）。

新吉 「（驚いて）一軒家？」

一郎 「俺も信じられないんだけど……」

新吉 「もう一生、養ってくれたりして。あ、ギン

ナントとシシトウ。喰う？」

一郎 「シシトウだけ」

新吉 「ギンナン1つとシシトウ2つね。あと、ホ

ツピーおかわり」

大将の声 「あいよ」

一郎 「どうなんだろうねえ。素直に喜んでいいものだろうか……」

新吉 「何も考えないで、もらつとけもらつとけ」

一郎 「大将、ホツピーを新吉の前に置く。」

新吉 「いいのかなあ」

一郎 「いいんだよ。人生、そんなもんだ」

新吉 「罰が当たりそう」

一郎 「どうせ罰が当たるんなら、贅沢しといた方が徳だ」

新吉 「ただけだなあ……気持ち悪いというか……」

大将 「お前、昔から貧乏性で根性なしだからな」

新吉 「へい。お待ち」

大将 「ギンナンとシシトウの串を持った大将の手が出て来て、皿に置く。」

※四六 一郎のコーポ・前（朝）

部屋の窓が開け放たれている。窓から室内の様子が見える。  
室内で荷作りしている、一郎。  
作業を着た新吉が運転する赤帽の車がコーポ前に停車する。  
クラクションを鳴らす、新吉。  
振り向いて外を見る、一郎。

新吉

「（手を上げて）おまた」

一郎

「おお。悪いな」

新吉

「本業だから、気にすんな」

一郎

「サンキュー」

※四七 一郎のコーポ・前（朝）

コーポの前に停まっている赤帽車。  
新吉と一郎が荷物を運び出している。

※四八 一軒家・前（昼）

一郎と新吉の乗った赤帽車、一軒家の前で停車する。  
車から降りる新吉と一郎。  
新吉  
「（驚いて）すげえ」

※四九 一軒家・一階廊下（昼）

荷物を運び込む、一郎と新吉。  
新吉、荷物を下ろして部屋を見回す。  
新吉  
「なんなんだこの広さ！」  
新吉、階段をかけたのぼる。  
新吉の声  
「贅沢すぎるぞ！一郎」  
新吉、次々に収納スペースの扉を開けて行く。  
新吉の声  
「俺もここに住む！」  
インターフォンの呼び鈴。  
一郎、モニター型インターフォンへ移動。

親切係

モニターに親切係（ハメコミ）。  
「お引越しおめでとうございます。特上天  
ざるをお持ちいたしました」  
「え？」  
一郎

§五〇 一軒家・二階和室（昼）

出前のおぼんが贈り物リボンで飾られている。  
大きなエビ天を食べる、新吉。

新吉

「やっぱり特上はエビがでかいなあ」

そばをすする、一郎。

一郎

「どうして二人だつてわかつたのかなあ」

新吉

「その辺に隠しカメラでもあるんじゃない  
の？」

新吉、にやにやしてエビ天をもう一口。

一郎

「え？」

一郎、不安になつて隠しカメラを探す。

§五一 薬師寺の屋敷・キッチン（夕）

あやめ、大きな蟹の足を切断する。

§五二 薬師寺の屋敷・食堂（夜）

カニちらしを食べる、三人。冷酒。

節子

「（食べながら）気に入っていただけでよか  
つたわ」

一郎

「（食べながら）僕にはちよつと広すぎます  
けどね」

あやめ

「（食べながら）狭いよりはいいですね」

一郎

「ええ。まあ…それはそうなんですけど…」

節子

「（笑つて）あやめさん、この蟹おいしい」

おやめ

「（笑つて）そうですか。 xです」  
「へー。そうなんですか」  
一郎、再びうまそうにちらしを食べる。

節子、その様子を見て笑う。

あやめも笑う。

一郎 「あの家、ほら駐車場があるじゃないですか」

節子 「ええ」

一郎 「（嫌らしく）でも、車が、ないんですよ」

節子 「そう言われてみると、そうですね」

一郎 「僕、ポルシエに乗ってみたいんです」

節子 「ポルシエ？」

一郎 「ええ。そしたら節子さんをドライブにお連れしますよ」

節子 「一郎さんとドライブ？それは楽しそうですね」

あやめ 「素敵。わたしも一緒にしてもよろしいでしょうか？」

一郎 「あ、はい。それは勿論いいですけど……。しかし……ポルシエは基本的には二人乗りなので……」

あやめ 「あやめ、きよとんと一郎の顔を見る。」

節子 「節子が笑う。」

あやめ 「（笑いながら）あやめさんはお留守番ね」

節子 「（落ち込んで）……左様でございますか」

一郎 「嫌らしく笑いながら冷酒を一口。」

### 三五三 一軒家・前（朝）

ここにこしながら門から出てくる、一郎。

一郎 「ポルシエ。ポルシエ……」

駐車場を見る。

車はなく、空のまま。

一郎 「あれ？納車、遅れてるのかな」

ポルシエのエンジン音。

親切係が運転するポルシエが入っている。

ポルシエ、贈り物リボンで飾られている。

ドアには「一郎号」のネーム。

振り向いてポルシエを見る、一郎。

一郎 「うわっ！本当に来た！」

ポルシエ、一郎の駐車場に停車する。

一郎、ポルシエに駆け寄る。  
「お待ちしてました！」

親切係、笑いながら伝票を持って車から降りる。

「一郎様。サインをお願いします」

親切係、伝票を前に差し出す。

一郎「顔を綻ばして」はい！」

一郎、にこにこしながら伝票にサインしようとする。

#### §五四 一郎の会社・営業部（朝）

月間成績表の前に立つ竹刀を持った加藤。

その周りに社員たち。一郎もいる。

加藤「…そして今月も最下位はまたしても、一郎だ」

竹刀で床を叩く、加藤。

一同、笑う。

加藤「一郎には最下位賞として、便所掃除でもやってもらおうかな…」

一同、更に笑う。

一郎、スタスタと加藤の前に出る。

加藤を睨みつけるように見る。

「ん？文句でもあるのか？」

一郎「こんな会社、辞めてやる！」

加藤を突然殴る、一郎。

加藤、竹刀を振りながら倒れる。

一同、どよめく。

#### §五五 薬師寺の屋敷・座敷（夕）

一郎と節子とあやめ。

節子「…辞められんですか、会社…」

一郎「僕、もともと向いてなかったんです、営業」

あやめ「お嬢様のパソ、コンはどうなるんです？」

一郎「それはもう、僕が個人的に責任を持ってケア

いたします」

節子「（笑って）それなら安心ですね」

一郎 「あの…（節子をジッと見る）」

そのまま頭を下げる、一郎。

きよとんと一郎を見る、節子とあやめ。

一郎 「実は、急にこんなことになってしまったものですから、再就職までの生活費が少し足りなくて（節子を盗み見る）」

節子、心配そうに一郎を見てうなづく。

一郎 「再就職と言っても不景気の今日この頃、なかなかどうして時間がかかるのではないかと…

（節子を盗み見る）」

節子 「一郎さん」

一郎 「（ぴくりとして）はい」

節子 「ご自分の会社をお持ちになれば？」

一郎 「え？」

節子 「ご自分が社長になれば、いろいろとやり良いでしょうから」

一郎 「はあ」

あやめ 「（笑って）それは名案ですね」

### §五六一 軒家・一階（朝）

洗面所。

歯を磨いている、一郎。

呼び鈴。

反応してモニター型インターフォンに移動する、一郎。

カメラの前に立っている、親切係（ハメコミ）。

一郎 「？」

親切係 「おはようございます。社長。お迎えに参りました」

一郎 「社長？」

### §五七二 一郎の会社・前（朝）

親切係が運転する黒いハイヤーが会社の前に停まる。後部席には一郎。

会社の入口が贈り物リボンで飾られている。

一郎の声 「僕はもうこの会社を辞めたのに」  
親切係の声 「今日から一郎様が社長でございますから」  
一郎の声 「ええ？」

●五八 一郎の会社・社長室（朝）

足の長い美人秘書（二四）長室のドアを開ける。  
後ろに立つ、一郎。

入って来る、秘書と一郎。

秘書、大きな机へ移動してその前に立つ。

秘書

「どうぞ」

一郎、ぎこちなく移動して、社長の椅子に座る。

秘書

「座りごこちは、いかがですか？社長」

一郎

「（にやにやして）いいです。すぐくやわらかくて……」

●五九 一郎の会社・営業部（昼）

マイデスクに座って定規で肩を叩いている、

加藤。元気がない。

OLが加藤の前で立ち止まる。

OL

「部長。社長がお呼びです」

加藤、びくりと反応してOLを見る。

OL、一礼して去って行く。

加藤、頭を抱える。

加藤

「やべえ……」

●六〇 一郎の会社・社長室（昼）

一郎、机の上に置いてある葉巻ケースを開けて  
みる。

一郎

「葉巻か……」

一本、手に取ってみる。

隣の部屋にいた秘書が素早くライターを持って  
駆け込んでくる。

一郎、驚いて秘書を見る。

秘書、笑って火をつける。

一郎、しかたなく葉巻を口にくわえて火をもらう。

ノツクの音。

秘書、振り向いてドア方向へ移動する。

一郎、葉巻を金魚でパカパカ吸う。

「おいしくない」

秘書に誘導されて入って来る、加藤。

秘書

「社長。加藤部長です」

一郎、笑って加藤を見る。

秘書、ドアを閉めて出て行く。

加藤、落ちつきがない。

「（笑って）加藤君」

「は、はい」

「（笑って）君、クビだから。もう永久に会社

しくていいよ」

「そ、そんな！」

加藤

## 第六一 高級クラブ（夜）

テロップ

「一年後」。

嘘臭い薄い色のサングラスに髭を生やした

一郎がホステスをはべらせながらブランド

Iを飲んでいる。手には葉巻。

端の席で小さくなって座っている、若手社

員三名。

一郎、懐から百万円の束を出してうちわ代

わりにする。

ホステスたち、札束に反応して一郎に擦り

寄る。

「ほら！拾え！貧乏人！」

一郎、百万円を投げる。

ホステスたち、万札を拾おうとパニック状

態。若手社員たち対応に困っている。

一郎の携帯電話がなり、反応して出る。

「はい。もしもし。あ。どうも。あやめ

さん」

一郎

一郎

一郎、立ち上がった席を離れる。  
「え？節子さんのパソコンが？故障？はい。

わかりました。じゃあすぐに向かいます。

はい。失礼します」

一郎、携帯電話を切る。  
ホステスたちそれぞれ手に万札を握りしめてニコニコしている。

一郎、戻って来る。

「（ぶつぶつと）…たく、コンセントが外れてるんじゃないか？タコトラブルでいちいち電話すんなよ。ボケ」

テーブル前に戻り、隅にいる若手社員を見る、一郎。

「うーんと…明」

若手社員の明、素早く立ち上がる。

「はい！」

「薬師寺の屋敷、知ってんだろ？」

「はい！」

「パソコン、調子悪いそうだから、ちよつと面倒見て来いや」

「え？それはマズイじゃないですか？社長」

「いいんだよ。俺はあれだ。風邪かなんかで調子悪いとかなんとか適当に言っとけよ」

「あ…はい」

「ほら。とつとと行けよ」

「はい」

明、走って店を出て行く。

「素人にコンピューター持たせるとロクなことねえな」

一郎、自分の席に戻る。

ホステスたち、一郎にまとわりつく。

第六二 一郎の会社・社長室（朝）

一郎、かつたるそうに入ってくる。

一郎 「あー。二日酔。京子、水くれ」

社長席には明が座っている。その隣に親切係が笑って立っている。

一郎 「明。お前、何やってんだよ！」

明 「今日から僕が社長です」

一郎 「なに？」

明、ニヤリとして机の引出しを開けて中からビールに包まれたりボン付きの魚を取り出す。

明 「もらったんです。節子さんに」

唾然としてその魚を見つめている、一郎。

笑って一郎を見ている、明と親切係。

### ※六三 回想・薬師寺の屋敷・座敷（夕）

節子 「（淋しそうに）あなたは？あなたは来て

いただけなの？」

一郎 「私は営業ですから……」

節子 「あなたがいいわ。そうしていただけのなら、これいただきたいのだけど」

### ※六四 イメージ

薬師寺の屋敷・庭。

アップの一郎がけたたましいスピードで遠

ざかっけて行く。

一郎 「あーあ」

N 「約束は守りましょう」

### ※六五 薬師寺の屋敷・キッチン（夕）

あやめが分厚いステーキ肉を切る。

### ※六六 薬師寺の屋敷・食堂（夜）

ステーキを食べる、明と節子とあやめ。

明 「僕、ヨットが大好きなんですけど、ヨッ

節子

明

トで世界一周するのが僕の夢なんです」  
「ヨットで世界一周なんて素敵ですね」

「だけど、そんなの夢のまた夢ですけどね

(笑う)」

節子

「だめよ。あきらめては。信じ続ければ夢  
は必ずかなうもなのです」

あやめ、肉を食べながらにやりと笑う。

「だと、いいんですけどね」

明、ナイフでステーキを切る。

節子、笑いながら赤ワインを飲む。

【おわり】